
神の選択

十磯長 骸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択

【Nコード】

N6877Y

【作者名】

十磯長 骸

【あらすじ】

俺は自慢じゃないが妹以外と話せない
だけど何でこんなことになったんだ
目線が合うだけで腹がいたくなるってのに

俺の職業は

浅日香美の恋人

初任給は2000万

はたして俺は妹の病気のためにしっかり働くことが出来るのか!?

こうしてしゃべれない俺は恋人ができた

ブローグ

突然ですがお便り申し上げます

父さん、母さん、陽子へ

兄さんにも仕事が見つかりました

だから探さないください

お金は通帳に入れます

話は変わりますが兄さん恋人が出来ました

兄さん泣きそうです

嬉しさからではないのですが

事の顛末をここに書きつづります

長くなりますが読んでください

~~~~~

「私としたことが三枚もある手紙なのにジュースをこぼしたせいで

最初の5行しか読めなくなってしまったわ」

「これは怒るわね

しょうがないこのまま出してしましましょう」

「どうせあいつはここから私の許可なく出られないのだからわかるはずないもの」

>二人目のerror 深見一樹<

俺は不幸なのかそうではないのか

人にそれを問えば不幸だという

しかし俺は何の不幸にも見舞われていないし  
そう思ったこともない

なぜなら俺の家族のほうがずっと不幸だ  
幸せが相対的なものなら俺は絶好調に幸せだ

俺は人と目を合わせることが出来ない  
自分より立派な人間と出会うと少なからず緊張するだろう

俺は最低な人間だからそれはすべての人に当てはまる

つまり人としやべったりできないのだ  
話しかけられれば冷や汗が出る

目が合えば腹が痛くなる

そしてしゃべろうとするだけで吐き気が出るのだ

何かきっかけがあつたわけではない  
氣付いたらこうだった

よく分からない人もいるかもしれない  
例を挙げよう

あれは中学の時新任の先生の言葉だ

「はい、深見さん例題8を解いてみてください」

おれは吐いた

このレヴェルである

そして妹以外話しかけられないので訂正できないのだが  
おれは深 見一樹だ

わざとか、俺のクラスに妹がいてそいつのみよじが深なんだから察  
せよ

だが捨てる神あらば拾う神あり  
そんな俺にも唯一会話できる相手がいた  
妹の陽子である

口癖はドラゴンパンチ  
双子の妹で明るく友達も百人できていてもおかしくない  
彼氏はいない作らせない

もし妹に告白でもしてみろ毎日画びょうを靴に入れてやるかな！！  
彼女が笑えばみんなもつられて笑ってしまつような笑顔を持っていた  
可愛くうへえと笑うのだ

俺のこの暗すぎる性格は初め誰も気づかなかった  
陽子とはよく話していたし

何か言うときも陽子がお兄ちゃんがうって言ってるー  
と俺の代わりに喋ってくれていた

初めに両親が異変に気付いたのは  
小2の夏陽子が友達のうちに行つてるときだ

その時まだ小さかったので覚えていないが  
夕飯が何かいいか聞いたという

いつもは陽子が言っていたし好きなものだけは似ていたので  
それでうまくいつていた

しかしその日は陽子もいない  
いつこうに返事もしないことに不審に思った両親  
もその時は何も言わなかった

しかし目も合わせない  
そして両親は自分たちが話しかけられたことがないと知ると  
母さんが「ちょ、おま、ちょ」といつて  
急いでカウンセリングに連れて行つたらしい

しかし話しかけられればお腹が痛くなり

話そうとしたと思えば嘔吐するのでは何もできない

カウンセラーも

最終的に鬱になってしまった

話しかけることに吐き気をもようされたらかなりくるものがある

しかし陽子は違った

親からも変な子が生まれたと嫌な顔をされるようになったのを

自分のせいだと言い張り世話を焼いてくれた

俺の自室に監視カメラがあるのはそのためだ

いまだに何のためかはわからない

そのおかげで話しかけられも吐かないぐらいに成長した

しかしそれでも限界がある

親に愛想をつかれるのも時間の問題で捨てられると考えた

その日から俺はいい子になった

何か人が困っていればその困っている内容を盗み聞き

こっそりと準備をして助けるのだ

友達などできるわけではないが学校に行き

そこでも誰かが困っているとこっそりその内容を聞き

手伝っていた

そのおかげで評判も悪くはなかった

先生にも気に入られ（頻繁に手伝いをしていた）

病気だからみんな話しかけないようにという

聞きようによつてはクラスぐるみのいじめだが  
俺にとって最高のフォローもしてもらえた

自分の耳が異常にいいと知つたのはこの頃だつた

この耳のおかげで親の要求をいち早く知ることが出来  
情報収集も容易で人と話さなくとも困らなかつたのだ

親からもお前は人の顔色を読む天才だな  
と言われ家の中で地位を確立した

だが本当に気の休まるのは陽子といるときだけだつたし  
俺たちが大きくなつても仲が疎遠になることはなかつた

高校も同じものに入つた

同じクラスだといいねと言つてくれていた

そんなときだ陽子は病氣にかかつたのは

心臓の病らしい

だがお金さえ払えば意外と簡単に治るものらしく  
みんなほつとした

しかしその帰り道交通事故が起きた  
俺たちの乗つた車だつた

その時のことはよく覚えていない  
目が覚めたら病院だつた  
けがはなく一日で退院できた

話を聞くと

飲酒運転をしていたトラックに正面からぶつけられたらしい

しかし運の悪いことに犯人はそのまま逃げてしまい

父は足をけがして

全治二か月だといいい渡された

あまり大したけがではなかったと父は笑っていたし  
病院に縁がある日だと笑っててもいた

しかしそれから散々だった

家に帰れば家が荒らされていて

貯金もなにも残ってはいなかった

母はそれを見て陽子はどうなるの！と叫び寝込んでしまった

俺には慰めることもできない

声をかけられないからだ

陽子はそんなことがあったというのに笑っていた

そして俺の顔を見て泥棒なんてしないでね

私はこのままでもいいからと俺にやさしい言葉をかけていた

俺は妹のために泣きたかったがなぜか涙が出なかった

変わってやりたいとも心の底から思えたし

陽子がいらない世界に俺の居場所はないとも思った

そんな時神の選択から呼び出しをうけた

> 選択の結果<

正直自分にはどんな仕事も勤まるとは思えない  
だがしかしやらなくてはならない仕事ってのがある

妹を殺してはならないのだ

どんな仕事でもやるしかない

この国で人は一つの職業にしか就けない

神の選択というシステムがこの国を回しているからだ

母はスーパーのレジ打ちだが寝込んでいるし  
とび職である父はけがが治るまで仕事はできない  
あれ俺ここで結構いい仕事見繕ってもらはないと飢え死にじゃね

神のシステムってのはコンピューターのことだ  
高度な計算からその人の外見仕草から性格を読み取り  
その人の最適な職業を選択する

それにはどんな人も逆らえない

国王の息子だつて才能がなければ  
クリーニング屋になることだつて稀じゃない

そつえばこのまえ隣の家のよつたんが勇者になつたな  
一体どんな仕事内容なんだよ

俺は神社で願掛けをした

神と名のつくシステムなら神頼みしかないと思つたのだ  
妹のためしいては自分のためだが何とか少しでもおおくお金がほし  
かった

どうしても人と目が合つてしまい

なんども気持ち悪くなつたがサングラスで  
目が合わないようにすることでたどり着くことが出来た

ただあいつのサングラスなにあれという陰口  
を言われた

耳がいいから街に出るといろんなことが聞こえる

助けてー変な人に追っかけられてるー

とか強盗だーとか万引きだー襲われるーとか

誰も聞こえておらず平然としている中で

俺だけはその声を聞き取れる

つてか物騒だなこの町！！

やはり初対面の人だと目が合うだけできつい  
何度かあつていれば目を合わせても少しなら大丈夫なのだ

いま俺は神のシステムの前に立っている

先ず小部屋に通された

そこには

警備員さんと

神のシステムそのものがあつた

どうやらサングラスは外す必要があるらしい

警備員さんには筆談で目をつぶってほしいといった

かみのシステムは

大きな箱というイメージだ

真っ黒で異様な雰囲気がある

このコンピューターが膨大な計算をすることで

その人の適性に合った仕事をはじき出す

カメラが俺のことをなめまわすように見る

コンピューターの中で

はじき出された職業は無職

国から支援の必要最低限の補助を受け生活するだけの職業

そう、挨拶もろくにこなせない俺に適する職業なんてなかったのだ

>警備員さんは黒髪ロング<

私は神の選択で仕事をしている

神の選択の前でその人が職業をもらうのを見張る役目だ

今私は目をつむっている

今職業をもらっている人が対人恐怖症らしくサングラスをとれないらしい

だがそんなものの着用は認められていない

そのままの顔で神の選択の前に立たなくてはならない  
神の選択に誤差が出ては大変だからだ

前例はないが目をつむってあげることにした  
なんでも彼は人の視線を感じるだけでも体調が悪くなるらしく  
可哀そうだと思つてのことだった

しかしいつまでたつても終わる気配がない  
いつもならこのぐらいで職業の書いた紙をわたされ  
神の選択の前から立ち去るはずだ

目を閉じたまま理由を聞いても返事がない

6年務めてきたが  
私が神の選択がエラーを起こすのを見るのは初めてだった

>嘘<

神の選択の前で俺は泣いていた

そして俺はある決心をした

他人にとってはなんでもない決心かもしれない  
うまくいかないかもしれない

だがけして妹を殺してはならない

俺は神の選択の隣で目をつむっている警備員さんに話しかけた

「すみません、機械が反応しないみたいですけど」

試したことはなかったがどうやら

人と話すとアレルギーのような感じで

血を吐くように俺の体はできているみたいだ

そして俺は喉から血があふれるのを感じながら  
倒れていく

だが口は絶対に開かない

一滴でも血を吐くことは許されないのだ

決意のために

そう俺は知っていた

神の選択にもエラーってのがまれに起きる  
職業を書いた紙が出ないことがあるそうだ

そんな時仕方なく人が職業を決めるらしい

やはりコンピューターも万能ではないのだ

俺はそれにかけた

> 浅日さん<

俺は何とか立っていた

人と言葉を交わした後遺症だ  
頭がずきずきする

ほほを濡らす俺を見て

安心して職業はもらえるからと  
警備員さんは言ってくれた

白い建物に通されココで職業を決めてもらえるらしい  
扉を開けると

女の子が机に座って漫画を読んでいた

妹も持っている漫画で題名は江戸時代で目からビームをだ  
なぜ人気があるのか理解できない

こちらに気付いた少女は浅日というわと自己紹介してくれた  
俺は来る前にもらった職業希望書という紙に

話せないということと職業はなるべく人と話さない  
ものがないと書いておいて渡した

陽子なら絶対に浮かべることのないような邪悪な笑みを浮かべて  
「じゃあ私の助手になるのがいいわ、ちょっと待っていて」

この誘いに乗ってはだめだと俺の頭が警報を鳴らす  
それに最低でもお前とは話すようじゃないか

「私のお金じゃないし好きなだけ報酬は出すわ」

俺は本当かと顔を上げた

癖でずっと下を向いていたのだ

だから状況をうまく判断できていなかった

声から女の人だとわかつてはいたが

思ったより小柄で少女といった感じだそして美しかった

腰のところまである白髪

透き通るような黒い瞳

なぜか頭にウサギの人形が乗っている

これで邪悪な笑みを浮かべていなければ

二つ返事で世話になっていただろう

しかしどんなに渋ってもこの子の決定は絶対だろうと思わせる何か  
があった

そうだ俺が俺として生きるには

受けるしかない

もしかしたら全然たいしたことないかもしれない  
所詮子供のする事なのだ

そう思ってた俺を叱りたい

> 真実<

「ねえ紙っておいしいのかしら」

いきなりの話題変換

普通なら意味は分らない

しかし俺は違った

ばれているのかいやそれなら俺はここにはいないはず  
泳がされた？なぜ

「もしかしてあなたなら知っているんじゃないかと思って」

「ここから私が出ることはできない  
でもE R E E Rの人の個人情報送られてくるの」

「あなたには特殊な能力も測れないほど大きな能力もない  
E R E E Rが出るはずないのよ」

やめろ、やめてくれ

「でも持ち物検査は出るときに行われる  
機会を壊したとは考えにくい」

俺は終わったと思った  
しかし次の言葉は予想していなかった

「取引しない？」

>取引の内容<

「私さここに閉じ込められているの」

話の展開についていけない

「さびしくない？」

しらない

「つれないことゆうなよー」

心よまれた！

「家族つてものがほしいの」

「そうすれば神の選択でしたことは黙っているわつかまるわよ？」

どうやらこいつはすべて分かっているようだし  
しかしこの話の流れはなんなのだろうか

「私を妹にしない？」

突然の提案

頭が真っ白になる

「俺には、もう、妹、は、いる」

何を言ってるんだ俺は

それまでの場になんか飲まれていたこともある  
相手が俺の目をずっと見ていたこともある  
きつと頭がおかしくなっていたのだ

あ、俺、人としやべってる  
きずいた時にはもう遅い

意識が遠くなる

ぐはつと盛大に血を吐いた  
飲み込んだ、神の選択が出した無職に認定すると書いてある紙と一  
緒に

「、、、、私の真っ白なドレスが真っ赤になったわ  
というより大丈夫かしらこの人」

「そういえば妹は間に合つてるといふ話だったわね  
なら恋人しか残ってないじゃない」

> 妹陽子の様態<

私は心臓の病気で手術をしなければもう命が危ないそうだ  
さらにお金が絶望的にないらしい  
しかし私の憂鬱の原因はそんなことじゃない

今日はお兄ちゃんが来なかったと何度も吐いた溜息をまた吐く  
毎日来てくれていたのに

嫌いになってしまったのかと心配になる

昨日リングをウサギみたいに切つてと無理な要求を言ったのが悪かったのか

それとも私のことが重荷となつてしまったのだろうか

どんよりと空は暗くすきな漫画も面白くない

そもそも江戸時代にビームなんて出せるはずがないのだ

お兄ちゃんのいない世界は何も楽しくない

もう私は死んでしまおうかと思った

命が助かる見込みがないと知っている

それにお兄ちゃんに嫌われてまで生きようとは思えなかった

仲のいい看護師さんが入ってくる

ここに来るのは同情からかと暗い思考が脳をかすめる

「元氣？」

そんなわけないだろ今日はお兄ちゃん来てないんだぞと思ったが  
日ごろの癖でうへえと笑う

そういえばいつも笑っているのがかわいとお兄ちゃんは言っていた

「相変わらずきもい笑い方だよねーはい、手紙届けに来てあげたよ」

ひつれいな奴だなと思ったが手紙のほうが気になった

やっぱりお兄ちゃんからだった

看護師さんがいなければひょっほーと叫びたい気分だった

嫌われてなかったと安堵した  
そつだよ嫌われるわけないじゃんと思ひ直す  
世の中希望であふれてる

「じゃ、私は行くから」

看護士さんが帰った後にやにやしなから封を開ける

三枚の手紙と通帳とハンコが入っていた

一枚目の手紙には仕事みつかった。日給この通帳に入れるから  
病院に払ってくれと書いてあった

そのあとの文字が読めない  
なぜかにじんでいるのだ

二枚目も三枚目も同様で

でもお兄ちゃんが手紙を書いてくれたのが嬉しくて

どうやらオレンジジュースをこぼしたらしい

オレンジはお兄ちゃん嫌いなはずなのに

そもそも濡れた手紙をそのまま出すだろうか

きつとオレンジジュースをこぼした別の誰かがいるに違いない

もしあったらただじゃおかない

生きた内に合う確率はほばないと思うが

驚くことに通帳には2000万はいていた

手術は成功した

一体お兄ちゃんは何の仕事を始めたのだろうか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6877y/>

---

神の選択

2011年11月21日07時52分発行